

# 國語教育研究

## 第六十七号

### ●研究論文

- 読者のエンゲージメント、行為主体性、喜びを味わう読み  
—読むことの研究の国際的動向— 山元 隆春 (1)
- ふりかえりと方略習得を兼ねたコンピテンシーカードの提案  
水田 遼介 (11)
- 生き生きとした言葉の教室をめざして  
—さまざまな表現実践から— 田中 啓介 (22)
- 詩の創作による「見方・考え方」の発見をめざした授業づくり  
—金子彦二郎の「暗示的指導」と「生徒作品例の教材化」を意識して—  
河隅 道子 (31)
- ことばの教育の定位と挑戦  
—「私達まつり」を読み開く— 小山 秀樹 (41)
- 人新世における文学的想像力の可能性  
—ネイチャーライティングを手がかりに— 村島 舞弥 (52)
- 「水の東西」の筆者の意見を吟味する学習活動に関する省察的研究  
—学習者の論理的な認識力の実態把握のために— 玉木 雅己 (64)
- これからの時代の教育における漢文教材の価値の再検討  
—現行教科書所収の「文」ジャンルの教材を例として— 山田 和大 (75)
- 『伊勢物語』初段の「をいつきて」 佐々木 勇 (89)
- 国語教育個体史の研究  
—山元隆春講師「文芸教育論特講」・「文芸教育論演習」の受講を中心に—  
渡辺 春美 (99)

### ●翻刻

- 龍谷大学図書館蔵『保元物語』近世初期写本 翻刻 (六)  
広島大学日本語史研究会 (115)

### ●第66回広島大学教育学部国語教育学会・研究協議

- 協議課題：中学校・高等学校国語科におけるあたらしい授業づくりへの  
取り組みと課題 (1)
- 国語科授業におけるプレゼンテーションツールの有効性 横田 拓也 (124)
- 『伊勢物語』注釈書を用いた授業実践  
—言語文化の担い手としての自己に出会う— 山口 倫香 (133)
- 二〇二〇年代の国語科における新しい授業づくりと教師 間瀬 茂夫 (143)

### ●NET 国語教育会

### ●編集後記

(152)  
(157)

広島大学国語教育会

## ことばの教育の定位と挑戦

——「私達まつり」を読み開く——

小山 秀 樹

### 一 学校設定科目「私達が立っている場所」二五年と「私達まつり」の構想

この稿を書き進めるにあたって、ことばの教育と国語の授業について私自身の個体史を手がかりに、現在考えていることを述べておきたいと思います。人とともに生み出され、人とともに持つことばが困難な状況にさらされている私達を励まし、救うことに私が気づいたのは、高校時代の尾谷誠基先生の国語の授業でした。私は大学時代、読書会、文学雑誌の発行、映画づくりに没頭し、国語教師となりました。人とともに持つことばを教室という場で次世代とともに紡ぎ、それぞれの生活に資するという論理は、それが困難な状況のなかでどう可能かという生き方の問題となります。「論理は終わった。あとは運動として生きるだけだ。」私はそう考えました。なぜ論理は終わっているのか。それは、ことばが共有される教室という場で、人とともに持つことばをつくり続けることが国語教師としての使命であることは揺るがないことだと考えたからです。その使命を、

ことばをつくり続けるという当事者として果たしたいと強く願ったからです。なぜ運動として生きるだけなのか。指示や解説をするものになるのではなく、いつも実践を持って生きてこそ初めてそのことばは他人の思考や行動の契機になります。予想される困難な職場や社会状況のなかで接近戦に負けないで必ず実現させるのだという覚悟が「運動として生きる」ということばの原像です。

ことばは人間の性質、資質、成育の過程などからさまざまにあらわされます。私は、獲得したことばを蓄積してよりよく生きてほしいという願いをもとに、特別な場面をつくってことばを共有することを常にこころがけて授業を続けました。国語には、単元的な学習という深い蓄積があります。名のある、また身近な先輩方の実践の場面と指導のことばに大きく勇気づけられたことは言うまでもありません。つたない実践のなかから、「私達が帰っていく場所」「私達が立っている場所」「私達がつくっていく場所」という単元の着想を得ました。たしか三五歳の時だったと思います。「帰っていく場所」は、主に古典を教材にしながら自身の根柢を見つめる授業です。「立っている場所」では社会の課題を明示し、どう生きるかを考えま

す。「つくっていく場所」は、今後の自身を構想し、ことばにする学習です。これらの三つの単元を通して、若い学習者のことばを鍛え、次世代とともに私も救われ、豊かに生きることにつながたいと考えました。なかでも「私達が立っている場所」は、三つの中心ともなる単元で、今宮高校で国語科学学校設定科目として受講者とともに育ち、二五年になりました。

授業開講二五周年を区切りにして開催した「私達まつり」は、私とこの稿を読む者にどのような「人とともに持つことば」を生み出すのか。「私達まつり」を読み解く記録・資料として冊子を三冊用意しました。(資料ⅠⅡⅢ デジタルブック版・ダウンロード版をつくりました。当日の様子は動画資料掲載のURLからご覧下さい。)かわった人たちの声に耳を傾け、振りかえるということが、意味と価値を探るための一番有効な方法となるように思います。

## 二 「私達」は現在、こんなふうを考え、生きていますスペシャル —「受講生の声」編—から

「私達が立っている場所」の授業を振り返ることは受講した卒業生に募集したところ、多数の返信をもらいました。「私達が立っている場所」の授業を振りかえることばはどれも、高校時代を始まりとしたひとりひとりの生活史となっていました。榊井英人先生は「私達が立っている場所」をあつかった論文(注1 資料Ⅲ)のなかで、次の視点で受講生の文章を取り上げ、考察されています。

①「教材の内容が生きている」

②「素手で考える」

③「私達が立っている場所について理解し、不断に問い直す」

④「場が誘発する学びとの関係」

⑤「学び手の可能性を信頼する」

⑥「場の力、指導者という重し」

これらの多岐にわたる視点は、学習者が授業という場でどこからどのように学ぶことになるのかという観点を教えてくれます。①どんな教材をどのようにあつかうか、②学習者の主体的な取り組みを促す授業のしくみ、③単元と問いの立て方、④⑤⑥場の創造と将来への見通しなど、学習者ひとりひとりが自発的な固有の学び方をしていたことに気づかされます。それは、授業者への救いと励ましともなります。なぜなら、よりよいことばの獲得を願う限り授業の目標は、単純で力づけなければ学習者がよりよいものとしてそれを受けとめてくれるということを教えてくれるからです。

## 三 「私達」は現在、こんなふうを考え、生きていますスペシャル —「私達まつり」授業・研究協議編—(「私達まつり」第1弾!)から

三人の「私達が立っている場所」受講卒業生による現役生への授業授業者 森木乃美(四天王寺中学校高等学校教諭)

坂井田暖(大阪医療センター附属看護学校三年)

藤本藍里(京都女子大学法学部一年)

扱う教材は『である』と『する』と(丸山真男)、「文学

のふるさと」(坂口安吾)、「安楽への全体主義」(藤田省三)です。卒業生、現役生ともに同じ教材を学習していて、卒業生が自身にとってその教材が現在どんな意味を持っているか、自身の現在と重ねて現役生に投げかけます。「である」と「する」、「ふるさと」と「大人の仕事」、「高度技術社会」や「能動的ニヒリズム」といった教材中の語彙が自身の生活経験に切り結ばれ、異なった世代による教材の読み込みを通して現代社会に生きるというリアルをことばでつかみなおすことはできないかという構想です。(資料Ⅱ)

三人の授業者は、どのような授業を展開するかを複数回話し合いました。事前アンケートで現役生が今どんなことを考えているのかを知り、それをもとに授業をつくろうとしました。授業後、森さんは次のように記しています。

「ことば」の広がり可能性を強く感じました。ことばで人と繋がり、それぞれの場でそれぞれの方法で、ことばに勇気付けられながらも生きていくのだなと感じました。大袈裟に思えますが、研究協議の参加者の方々のことばを聞き、特に強く心に残った感覚です。私のことばもまた誰かの、特に現受講者である高校生の何かに繋がれば嬉しいです。小山先生からお話をいただき、今宮高校の図書室に久しぶりに足を踏み入れた日から、まんまと策にかかり、この祭に巻き込まれてしまったわけですが、まずここで二人の素晴らしい同志と出会うことができまじら、本当に楽しく充実した時間でした。

当日の授業では、今の現役生にとっての私たちにしてほしい授

業はどんなものか、と悩み考え実施した授業を大変素直に真摯に受け止めて参加してくれ、とても嬉しかったです。(資料Ⅱ)

この森さんのことばと「受講生の声」に対する榊井先生の視点を重ねて考えると、授業でのことばの学びの重要な観点に加えて、そのゆくえが浮かび上がります。

⑦〈世代を超えてことばをかわす〉  
⑧〈教材が自身のものの見方を支えてくれる〉

⑨〈ひとつの教材のことばが他の教材を読むことばとなる〉

⑩〈授業と生活を重ねる・教材を生きる〉

⑪〈丁寧な準備・知ること〉

⑫〈特別な場の刺激はことばを自身のものにする〉

榊井先生の視点の続きとして書き連ねるこの記述が、なんとことばの学びの定位を探るということに繋がらないかと考えます。

#### 研究協議

パネラー 三人の授業者

植山俊宏 (京都教育大学特定教授)

杉本 舞 (関西大学教授)

コーディネーター

榊井英人 (関西大学・京都大学非常勤講師)

杉本先生は高校時代に私の授業を三年間受けています。また、授業者の森さんは杉本先生の授業を受けています。(資料Ⅱ)

今日の授業では、文章を読ませる時に、それぞれの実生活や人生とのつながりが大事なのだと改めて認識しました。私は常に「これって君らのこういうことと近くない？」という話をするようにしています。今日は「今の高校生の実生活と骨のある文章のここがつながってるよね」という投げかけが確認でき、さらに同じ文章を読んだ先輩たちとのつながりが強く感じられ、そういう点でも面白い試みだなと思いました。

最近では、目に見えて効果が分かるものばかりが評価される傾向にあります。見えないものを計ることへの軽視を僕は憂慮しているのですが、今日思ったのは、文章を読むことにどういう意味があるかというのは、現時点では計れない。それが後になって分かってくるのかなど。こんな効果があるよと、今は言えなくても文章を読み込む意味はあるのだろうと改めて思いました。(教職員)

杉本先生のこんな発言もありました。

私は一九九六年から三年間、大阪教育大学附属高校天王寺校舎の小山先生の授業で今日の教材、「であることとすること」や「文学のふるさと」を学び、他に「こころ」を一年間読んだりもしました。それから二八年、小山先生にお聞きしたくて温めてきたことがあります。それは、テキストの読みとということをどう考えておられるのか、ということです。一九九七年、二年B組の現代文の授業で「こころ」を読んでいたんです。班ごとで担当して解釈

を発表していくという授業でしたが、中には「えっ、そんな読みができる？」みたいな発表もありました。当時、「新世紀エヴァンゲリオン」というアニメが流行っていて、そのアニメに引き付けたある意味ペダンティックな感じの解釈の発表が続いたことがありました。当時、私は、あまりにも作者の意図を曲解しすぎじゃないのかなという印象を抱いたのですが、先生はその場を流して終わり、そのことが心の底にずっと引っかかっていたのです。というのは、大学生に輪読させる時、私はできるだけ身勝手な読みはしないようにという考えを伝えます。そしたら学生は、じゃあ正解はあるんですかと言う。小山先生は、高校生が高校生なりに解釈したテキストの読みをどういうふうに捉えてこられたのでしょうか。大学一年生を指導していると、実生活とつながりにくい抽象的、理論的な内容を、理解の外に追いやろうという学生が少なからずいます。哲学や思想の難しい内容は、実生活とはかけ離れていて理解しづらい時もあるわけです。そういうような内容をどう取り扱っていけばよいのか。小山先生はどのように考えてこられたのか、私の二八年のために答えをお願いいたします。

(笑)

この機会に、専門の立場から申しますと、生成A-の時代になり、いろんなものがA-に代替されると、特に若い人は思っています。高校生も思っているのではないでしょうか。チャットGPTに投げかけたらそれなりの答えが返ってきますが、最後まで絶対に置き換えができないものは何かと申しますと、自分の頭の中

でモヤモヤモヤと考えていることを言語化することです。それだけは、チャットGPTに「私の考えていることをことばにしてください」と投げかけても絶対にしてくれない。そのチャネルはないので、自分なりにやるしかないのです。自分の考えを誤らざることばにしていくなめには、必ずことばに向き合っていくたくさんの経験が必要だと思っています。本日の研究授業を拝見して、今宮高校の卒業生の方、現役の生徒さんは、まさしく自分のモヤモヤと考えていることをことばにしていこうという、これから最も求められることばの力を育んでおられると思いました。自信を持って今後ともぜひ取り組んでいただきたいと思います。

ここで杉本先生が語られたのは、意識するかしないかにかかわらず、授業のことばや場面は長く記憶にとどまるということ、また、若い世代がことばによって希望を持つことができるという励ましです。研究協議から以下のことばの学びについての知見を得ることができます。

⑬ 特別な場面のことばは特別な種となつて学習者に植え込まれる

⑭ へどのようなことばが温められるかは予見しにくい。

⑮ 学習者は高い確率でこのころにことばをとどめ、それを振りかえる

⑯ ことばの経験を得ることのできるしくみや方法を確信することが重要

四 「私達」は現在、こんなふうを考え、生きてい

ますスペシャル —「私達まつり」スペシャルトーク・ディスカッション編—（私達まつり 第2弾！）から

スペシャルトーク

金城宗幸（漫画原作者）

石井英真（京都大学准教授）

山元隆春（広島大学教授）

ディスカッション

三人のスペシャルトークメンバー

梶井英人（関西大学・京都大学非常勤講師）

小山秀樹（大阪府立今宮高校）

三人から出た次のような発言は、これまで番号をつけながら記述してきたことばの学びの定位を探る試みに、励ましを与えてくれます。

最初に思うアイディアというのは、「私達が立っている場所」の時もそうだったんですが、勝手に自分が思っていることがすごい大事なことやなと思っています。例えば、僕はサッカー漫画とか描いているけれど、日本代表つてストライカーがおったらいのにとか、子供みたいなことから始めています。最初にどうやったら売れるかというより、何かそういうのを大事にしている

のが、今となつては大事だったのかなと思っています。自分で勝手に思うという、その最初の段階を経て思考していることが、「私達が立っている場所」とリンクしているかな。(金城氏)

概念と頭でっかち社会の中にあつて、概念として勉強はしても世の中を読み解く眼鏡になつていない。そういうふうに学んだことが生きて働いて使える学力になつていないところがあつて、この「真正の学び」(注2)があるわけ。でも、この「真正の学び」が、何か実用みたいな感じに思つかもしれないけれども、そういうことが本質ではない。結局、「真正の学び」とは本物かどうかです。学校と学校の外側を比べたときに、学校は嘘くさくないですかというのが根本の問いかけです。(石井氏)

深い読みとは、脳が気づかない、読者自身が読みについて気づいていないことの掘り起こしのようなこと。人とやり取りしたり、自分の中で考えたりすることで深い読みが起るのかなと思います。自分に正直に生きるのは難しいことですが、自分で考えたり、人と話したりする中で気づくことはたくさんあると思います。どう読んでいるかということは、実際には人とはほぼ話してないんですよ。たぶん読む行為を共にすることで、読んでよかったなと思えるのではないのかな。金城さんなんかはそういうことをやってきたんじゃないのかな。(山元氏)

①7「勝手に思う」と「面白がる」

①8〈授業でトゲを残す〉

①9〈文学理解の力動性〉

②0〈ことばの刺激が主体性を促す〉

②1〈授業者と学習者がともに救われる「ことばの学び」とは?〉

このような「ことばの学び」についての視点、観点、知見は学ぶひとりひとりに蓄積し、自らのことばを発する意欲となつて語る運動をつくり出します。3人のことばに触発されたフロアからの発言を紹介します。

三人の方のお話を聞いて、「ことばの力」をつけるということの意味を考え直す機会になりました。大阪府内の私立高校で国語科の教員として勤めています。地域の受け皿のような学校、いわゆる「困難校」です。授業中は数人しか教科書を開かない、何人もの生徒が教室から出入りする、といった状況で、自分が授業をしている意義とは何かを日々問われていると考えています。そのような学校だからこそ、生徒たちに生きたことばの力をつけてもらいたいのですが、そんな授業をできている自信がありません。私自身、学校に希望を見出せなかったことが今の勤務校に勤めている理由です。ところが、何をどう準備すれば生徒に授業が届くのか分からず、迷走する日々が続いています。その中であつても、小山先生が「生徒の状況にあつたステップを」と仰っていたり、梶井先生が「生徒に小さな疑問を出させるようにすればいい」と仰っていたりしたことを聞き、できることからトライアンドエラーでやって行こうと思えました。恥ずかしながら、授業が崩壊



しているからと諦めて行事などに力を入れていた面がなかったとは言えません。生徒を信じて、同じ目標を見る伴走者としてこれからも国語科教員として頑張りたいと思えました。(教職員)

お三方のトークそのものが素晴らしい作品であると感じました。そこから、私は個人的に、勝手に、また *authentic* に考えていました。特に、現在英語教員である私には、自分の授業ではどんなことができるだろう?と個人化する衝動を掻き立てられていました。巨人の肩に乗る経験(肩にたどり着けていたかはさておき)をさせていただきました。ありがとうございました。(卒業生)

「私達が立っている場所」がどんな場所なのか、私は言葉で表すことができません。授業の中で、ヒントや部分的に答えは教えてもらったと思いますが、明確な定義づけはされなかったと思います。また高校時代にとつての私が想定する「私達」は、今宮高校関係者(生徒・卒業生・教職員・保護者など)、あるいは日本人若者でした。しかし、今回の「私達まつり」は、今宮高校の生徒だけのものではなく、現職での教職員など、私が想定しない「私達」がいました。「私達まつり」に参加して、ますます「私達」の正体も、「立っている場所」も分からなくなりました。多分これからも「しこり」はとれないと思いますが、私にできることは「しこり」を面白がることかな、と思いました。(卒業生)

私の理解力がもっとあればいい!そんな風に悔しく思うほどこ

の講義がいかに面白くタメになるものであるかが分かって、もっと勉強して分からなかった部分が分かるようになりたい!と思う濃密な時間でした。また人生について、本や言葉を通ずる学びや教養について、改めて自分自身もそこに入りたい!と思いました。(高校生)

パネラーの先生方のそれぞれの想いがディスカッションで表現されていて、普段の授業に活かしていきたいと思いました。特にラストで金城さんが言っていた「小山先生が色々な人にトゲを刺し、その人たちがそのまた誰かにトゲを刺し、それぞれのスベシナルな道を作っていく」という言葉が響きました。私は小山先生には絶対なれませんが、授業や人との関わりを通じて私らしい道を作っていきたいと思います。(教職員)

ディスカッションでの質問への小山先生のご回答は、私の中ではある意味「答え合わせ」でした。高校生のときに肌で感じ、卒業後もお話する中で感じる小山先生の授業への姿勢、生徒へ向かう在り方を、私なりに解釈、私バージョンにして学校現場で実践しています。解釈は飛躍してなかったのかな、間違ってたなかったななどと考えていました。金城さんもおっしゃっていましたが、今の「これ」は小山先生にしかできないもの、だと思うので、私なりのアレンジ、自分としての実践が重要だなあと考えさせられていました。



デイスカッション全体で最後に話された高3生の言葉も印象的です。あの大人数の中で堂々と発現されていて素晴らしいと思います。

そして登壇されている先生方のお声かけが社会の現状にも触れながらも、心強く温かくて素敵でした。(卒業生)

生徒の心にトゲを残すこと。学びが「非連続」であること。すなわち、教えたことがそのまま何か有益なものにつながるのではなく、長く心に留まって、後々芽をふいて育っていくこと。すぐに役に立つようなものは浅いこと。これはコスバやタイパという言葉に象徴される「効率主義」全盛の時代において、たいへん重要な示唆があります。小山先生は、これからも生徒の皆さんによりきトゲを残し続けていかれるでしょう。「私達」を受講している生徒のみなさんには、授業を楽しみながらそれらを受け止め、数年後、数十年後の成長につなげてほしいと思います。私自身も(国語の授業の場だけでなく)そのような実践のできる教員を常に目指したいと思います。(教職員)

参加したひとりひとりが会場でかわされたことばに刺激を受け、自身のありようをことばにしたり他者に向かって働きかけることばを生み出したりしています。これらのことばは、ことばの学習の定位を探る試みに、確信を伴った希望を与えてくれます。

## 五 ことばの教育の定位と挑戦、あるいはひとりひとりが自身の「私達まつり」を

私の気づきは、五十年前に尾谷誠基先生のことばに触れたところから始まりました。

肝心なのは、雑誌ではなく文学でもない。九人が不断に相対化されうる場なのだ。この場なくして文学は所詮たつたひとりの営為に過ぎない。

僕らは己一個に対して誠実であることよりも、九人の場に対して誠実であることが、己に対してもより誠実であるような、そういう場をなんとかしてでもつくり出して見せねばなるまい。そうでなければ己一個の死とともにやがては墓場へと葬り去られる真実をしか僕は手にできないからである。すべてが始まり続けている。

人とともに持つことばを求めたつづけた私の教育活動は、今回は「私達まつり」という運動のかたちをとりました。私は「私達が立っている場所」の教室で、人とともにことばを持つとう、教材と学習者の生活を繋ごうと教材、目標、方法を鍛えて来ました。「私達まつり」は世代を超えてことばを持ちあおうとする試みです。「私達まつり」ではこの稿で挙げた「ことばの学び」についての視点、観点、知見をはじめとして、ことばの学習が年月を経てどのような成果を

もたらしたかを検証するという価値も持つことができました。私は「ことばの教育の定位と挑戦」ということが毎日の意欲や力になるより具体的なことばへ変換できればとの稿を進めてきました。資料ⅠⅡⅢ、ダイジェスト動画を参照の上この稿を読み進んでいただければ、ことばの教育についての「定位」とこれからの教育活動への「挑戦」のヒントが生まれる場所が必ずあると思います。ひとりひとりが自身の実践をあたまに置きながら読み進み、気になったり立ち止まった箇所がまさにその人にとっての「定位」と「挑戦」が明滅する地点に違いなく、ことばがより具体的、実践的に変換される場所です。生み出されたことばはこれまでのことばと似ているかもしれませんが自分自身が主体的に勝ち取っているという点においては、これまでとは非連続なものです。しかし、自分自身もまたこれまでの人たちが経験してきたような行為を現在重ね、自身の固有の軌跡を描いているという点においては大きく連続しています。「非連続の連続」は、つづく世代の「定位」と「挑戦」をより具体的に深化させます。なぜなら、私やともに学んだ私の仲間たちも同時代や過去の資料や現場からそんなふうに着目し、「定位」や「挑戦」を実際にあつかうことのできるものに変換し、掘り下げながら生きてきたからです。

「個体史」の概念は、運動として生きることを大いに勇気づけます。「単元」「主題単元」の構想は、授業にダイナミズムをもたらします。「価値学習」「技能学習」「小さなステップ」「評価はひとえに奨励のためにある」など、私自身の実践のヒントとなることばを書物や先生、先輩、友人から学びました。

金城宗幸さんは第2弾ディスカッションで教育のついで次のような期待を話しています。

ひとつ思うのは、小山先生、今日、お会いして、やっぱりこの人はこれしかないというスペシャリストじゃないですか。「私達が立っている場所」の人。教育システムは行政が変わるしかないけれど、そうじゃなくてマンパワーというか個人で、例えば小山先生のような人がみんなにトゲを刺し続ける。そういうふうにしてそれぞれの教員の方がスペシャリストになって、自分の惑星をつくっていったら、教育がちよとずつ改善されていくかもしれない。それくらい個人の決断とか、覚悟とか、スペシャルになるんだという、そういう人が欲しいと思う。夢があるし。自分の人生のスペシャリスト。だからあなたのスペシャルな道はきつとあつてシステムと戦うとはそういうことだと思っています。できればそういうふうに着目して進んでいけばいいなと思っています。

「私達が立っている場所」の学びは思考された文章をもとに自身の生活を重ねなおし、ことばをリアルタイムに創出、共有するという単元的なことばの学びでした。生み出されたことばは、同じ現在を生きる同士でかわされることによって力を持ち、生きて根を下ろします。自分が考えていたことは誰もが考えていたことだった。しかし、(あるいはそれだから)誰もが考えていたことに自分がたどりつき、自分のことばとして話し出したことは、自分にとって、またそれに耳を傾ける人にとってかけがえのないことだった。「私」が「私

達」になり、「私達」のなかに「私」を見いだすことばのひとつひとつがともに生きる「私達」の未来を構想します。そのことばと、そのことばを生み出す場面をつくり続ける運動が、ことばの教育の定位を確信した挑戦になればと思います。そうしてつづく若いみなさんがその自身のこころの動きから出発してそのことばを開き、話し、みなさんを含む「私達」の意味と価値を更新、創造してもらえればと思います。

## 注

1 梶井英人「国語教育の本質―私達が立っている場所」を参考に  
に」（関西大学教職支援センター 二〇二四 資料Ⅱ参照）

2 小山秀樹「ことばで生活を切り開く授業―私達が立っている場所」（鍊成現代文）二〇年の軌跡―」（高等学校 真正の学び、授業の深み―授業の匠たちが提案するこれからの授業―石井英真編著 学事出版 二〇二二）

（大阪府立今宮高等学校・桃山学院大学）

## 【資料Ⅰ】

「私達」は現在、こんなふうに考え、生きていますスペシャル

―「受講生の声」編―

### デジタルブック版



<https://www.adjustbook.com/doc/us/14151/bk/18503/>

### PDFダウンロード版



<https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/watashitachi/wataspe2.pdf>

## 【資料Ⅱ】

「私達」は現在、こんなふうに考え、生きていますスペシャル

―「私達まつり」授業・研究協議編―

### デジタルブック版



<https://www.adjustbook.com/doc/us/14151/bk/19751/>

### PDFダウンロード版



<https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/watashitachi/wataspe2.pdf>

「私達」は現在、こんなふうに考え、生きていますスペシャル

「私達まつり」スペシャルトーク・ディスカッション編

|                                                                                                                                                                                                                            |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| デジタルブック版                                                                                                                                                                                                                   |
| <br><a href="https://www.adjustbook.com/doc/us/14151/bk/2566">https://www.adjustbook.com/doc/us/14151/bk/2566</a>                         |
| PDFダウンロード版                                                                                                                                                                                                                 |
| <br><a href="https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/watashitachi/wataspe3.pdf">https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/watashitachi/wataspe3.pdf</a> |

|                                                                                                                                                                                                                         |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ダイジェスト動画                                                                                                                                                                                                                |
| 「私達まつり」第1弾<br>卒業生による授業<br><br><a href="https://www.youtube.com/watch?v=fq679m-PvGO">https://www.youtube.com/watch?v=fq679m-PvGO</a>    |
| 「私達まつり」第1弾<br>研究協議ダイジェスト版<br><br><a href="https://www.youtube.com/watch?v=t7tG0sualzI">https://www.youtube.com/watch?v=t7tG0sualzI</a> |

|                                                                                                                                                                                                                        |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ダイジェスト動画                                                                                                                                                                                                               |
| 「私達まつり」第2弾<br>スペシャルトーク<br><br><a href="https://youtu.be/7uTUEMgnA0o?feature=shared">https://youtu.be/7uTUEMgnA0o?feature=shared</a>  |
| 「私達まつり」第2弾<br>ディスカッション<br><br><a href="https://youtu.be/WYMCg0ztcy8?feature=shared">https://youtu.be/WYMCg0ztcy8?feature=shared</a> |